昭和二年十一月十日印刷
昭和二年十一月十五日發行

古今和歌集 ★★
定價四十錢

校訂者 尾上八郎

發行者 東京市神田區南神保町十六番地 岩波茂雄

印刷者 東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目 菊地眞次郎

株式會社秀英舍印刷

岩波文庫
169—170

發行所 東京市神田區南神保町十六番地 岩波書店
電話九段二一〇九番
振替東京二六二四〇番

岩波文庫
169—170

古今和歌集

嘉祿本　古今和歌集

古今和歌集は、醍醐天皇の延喜五年に、紀貫之、凡河內躬恒、壬生忠岑、紀友則に仰があつて、選ばしめられた歌集である。これが出來てから、後々に、勅撰歌集が相續き、古今集を加へて二十一部、いはゆる二十一代集が作り上げられた。

平安朝時代になつて、漢詩文の製作が盛になつた。且つ上にも嵯峨淳和二天皇の如き、好文の君があらせられたので、それらを選んで一書を作るべく、文學の士に命ぜられた。これで、我が國ではじめて、勅撰詩集が現はれた。この事は、嵯峨天皇の御時の弘仁から、淳和天皇の天長までに三度もあつた。この三集は、凌雲集、文華秀麗集、經國集である。

しかるに、その後おひ〳〵歌が多く試作せられた。外國の文學の形式を襲ふよりは、自國の語を用ゐ、調により、自己の懷抱を、殊更に支那化せしめずに、素直に發表する方が、どのくらゐ樂であり、且つ趣があるかもしれない。知らず識らず起つた自覺的態度は、日に日に歌の隆盛を來した。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertc

以上の故で、勅撰詩集でなく、勅撰歌集を編纂すべき勅命が下つて、延喜年間に古今集は出來上つたのである。選者の一人の紀貫之は序文を書いて、「貫之らが、この世に生まれて、この事の時にあへるをなむ喜びぬる。人麻呂なくなりにたれど、歌のことどまれるかな。」と喜んで、更に、「歌のさまをも知り、事の心を得たらむ人は、大空の月を見るが如くに、古を仰ぎて、今を戀ひざらめかも。」と云つた。古は、貫之らよりいふ古で、專ら奈良朝を指し、今は、自分らの時代、乃ち延喜の御世を云つた。實に、此集を讀んで、自分らは、天邊の大月を仰ぐが如く、延喜の聖代をしのび、貫之等諸歌人の風姿を想見するのである。

古今集は、貫之等の手によつて成つて、奉獻せられたのである。この最初のものは、從つて民間には止まらぬわけである。しかし、古寫本は種々ある。それは、貫之の自筆といふものが首で、道風、佐理、行成、公任、俊頼、顯輔、清輔等の筆といふものが引きつゞく。平安朝時代の有名の書家及び歌人の手に寫されたといふ古今集は實に多い。しかし大抵斷片となつて存在して、世にいはゆる古筆愛好者によつて、尊重せられてゐる。これらの中で、俊頼の筆といふものと同樣な元永三年の奥書のものが最も完全で、三十卷整つてゐて、價値の多いものである。清輔の書寫といふものも、これに次ぐべきであらう。

しかし、今日世に流布してゐるものは、以上のものでなくして鎌倉時代の初期に、藤原定家が、貞應二年七月に書寫したものである。このものは、二條家に傳へて、證本とした。この二條家が、定家の後を正しく受けたものであるから、定家が尊崇せられるとともに、その宗家所傳の本は尊重せられ、從つて流布せられて、今日、古今集といへば、專らこれをいふこととなり、大抵の教科書、又註釋書は、これによつてゐるのである。今日は、古今集すなはち貞應本の狀態である。

定家の子の爲家から、定家の家は三つに分れた。乃ち二條家、毘沙門堂家、冷泉家である。毘沙門堂家ははやく跡を絶ち、二條家と冷泉家とが、續いた。その兩家は、自づから競爭の位置に立つた。この故に、兩家用ゐるところの本も、異なるに到つた。

定家は、すでに述べた貞應年間に、古今集の定本を作つたが、嘉祿二年四月にも、また一の證本を作つた。前者を貞應本と云ふと等しく、世に後者を嘉祿本と唱へた。二條家が前者を用ゐるとすると、その反對の位置にある冷泉家は、勢嘉祿本を用ゐることとなつた。

しかし、二條家は榮えて、その門流が廣がつたに反して、冷泉家は、特に花々しいところがなかつた。從つて、貞應本は、廣く用ゐられるに反して、嘉祿本は、書寫の範圍も甚だ狹く、殆んど世上に現はれてゐない有樣であつた。今日に於いても、この狀態は、變らずにある。

貞應本に比べて、嘉祿本が特にいゝと云ふのではない。定家が同じやうに校合したのであるから、異なるところが多いわけはない。しかし、少差はおのづから存する。これも、筆者の寫誤と認められないところもないが、また參考に供すべきものもある。これらをよく對照して見たならば、學者は、益するところが多いであらう。その異なるところは、專ら字句であるが、それの歌に限つて、大凡を擧げて見れば（圈點は嘉祿本、括弧内は貞應本）左のやうである。

うつ(うゑ)しうへば秋なき時やさかざらん花こそ散らめ根さへかれめや

紅葉は袖にこきいれてもていでむ(でなむ)秋はかぎりと見む人のため

あかずして別るゝ袖のしらたまを(は)君がかたみとつゝみてぞゆく

北へゆく雁ぞなくなるつれてこし數はたらず(で)ぞかへるべらなる

するがなる田子の浦波たゝぬ日はあれども君をこひぬ日ぞなき(はなし)

風ふけば峯にわかるゝしらくものたえてつね(つれ)なき君が心か

うつゝにはさもこそあらめ夢にさへ人目をもるとみるがわびしき(さ)

世の中の人の心は花ぞめのうつろひやすき色(物)にぞありける

夏引の手びきの糸をくりかへしことしげくともたゝ(たえ)むと思ふな

我身から憂き世の中となづけ(なげき)つゝ人のためさへかなしかるらむ

かげろふのそれかあらぬか春雨のふる人なれば(みれば)そでぬれける

篠の葉におくはつしもの夜をさむみしみはつくとも色にいでめや(いでめや)

郭公けさなくこゑにおどろけば君を(が)わかれし時にぞありける

あふくまは霧立ちくもり(わたり)あけぬとも君をばやらじまてばすべなし

兩者いづれがいゝであらうか。學者は猶よく比較せられたい。

今日世間に、あまり貞應本ばかりが流布せられてゐるので、今こゝに、家藏の嘉祿本を公にしてみる。假名使も、送假名も、漢字も、大體原本通にして見た。たゞ、「礒上」、「いその神」、「松人」、「松」等の戲書は、「いそのかみ」、「待つ人」、「待つ」等に直した。「劍」、「南」も、「けん」、「なん」と改めて見た。又變體假名も、平假名に變へて見た。濁點と句讀點とは、讀者の便を計つてつけて置いた。原本の眞面目を知らうとする人は、これらを本にかへし、或は取り去つて見られたいのである。

昭和二年八月末日

校訂者しるす

古今和歌集

试读结束：需要全本请在线购买： www.erto

やまとうたは、人のこゝろをたねとして、よろづのことのはとぞなれりける。世中にある人、ことわざしげきものなれば、心におもふことを、見るものきくものにつけて、いひいたせるなり。花になくうぐひす、水にすむかはづのこゑをきけば、いきとしいけるもの、いづれかうたをよまざりける。ちからをもいれずして、あめつちをうごかし、めに見えぬおに神をもあはれとおもはせ、おとこをむなのなかをもやはらげ、たけきものゝふの心をも、なぐさむるはうたなり。このうた、あめつちのひらけはじまりける時より、いできにけり。あまつきはしのしたにて、女神を神となりたまへることをいへるうたなり。しかあれども、世につたはることは、ひさかたのあめにしては、したてるひめにはじまり、したてるひめとは、あめわかみこのめなり。せうとの神のかたちを、かたにうつりてかがやくをこめるえびすうたなるべし。これらは、もじのかずもさだまらずうたのやうにもあらぬことどもなり。あらかねのつちにしては、すさのをのみことよりぞおこりける。ちはやぶる神世には、うたのもじもさだまらず、すなほにして、ことの心わきがたかりけらし。人の世となりて、すさのをのみことよりぞ、みそもじあまりひともじはよみける。すさのをのみことは、あとてるおほむ神のこのかみなり。女とすみたまはんとて、いづものくにゝ宮づくりしたまふ時に、その所に、やいろのくものたつを見て、よみたまへるなり。やくもたついづもやへがきつまごめにやへがきつくるそのやへがきを。かくてぞ、花をめで、とりをうらやみ、かすみをあはれび、つゆをかなしぶ心ことばおほく、さまゞになりにける。とをき所も、いでたつあしもとよりはじまりて、年月をわたり、たかき山も、ふ

もとのちりひぢよりなりて、あまぐもたなびくまでおひのぼれるがごとくに、このうたも、かくのごとくなるべし。なにはづのうたは、みかどのおほむはじめなり。おほきゝきのみかどの、なにはづにて、みこときこえける時、東宮をたがひにゆづりて、くらゐにつきたまはで、みとせになりにければ、王仁といふ人の、いぶかり思て、よみてたてまつりけるうたなり。この花は、梅の花をいふなるべし。あさかやまのことばゝ、うねめのたはぶれよりよみて、かづらきのおほきみを、みちのおくへつかはしたりけるに、くにのつかさ、事おろそかなりとて、まうけなどしたりけれど、すさまじかりければ、うねめなりける女の、かはらけとりて、よめるなり。これにぞ、おほきみの心とけにける。あさかやまかげさへみゆる山の井のあさくは人をおもふものかは。このふたうたは、うたのちゝはゝのやうにてぞ、てならふ人のはじめにもしける。そもく、うたのさまむつなり。からのうたにも、かくぞあるべき。そのむくさのひとつには、そへうた、おほさゝきのみかどをそへたてまつれるうた。

なにはづにさくやこの花冬ごもりいまはるべとさくやこの花、といへるなるべし。

ふたつには、かぞへうた。

さく花におもひつくみのあぢきなさ身にいたつきのいるもしらずて、といへるなるべし。

これは、たゞごとこいひて、ものにたとへなどもせぬ物也。このうた、いかにいへるにかあらむ。その心えがたし。いつゝにたゞごとうたといへるなむ、これにはかなふべき。

みつには、なずらへうた。

きみにけさあしたのしものおきていなばこひしきごとにきえやわたらむ、といへるなるべ

し。　これは、ものにもなずらへて、それがやうになむある、とやうにいふ也。このうた、よくかなへりとも見えず。たちちめのおやのかふこのまゆどもりいぶせくもあるかいもにあはずて、かやうなるや、これにはかなふべからむ。

よつには、たとへうた。

我こひはよむともつきじありそ海のはまのまさごはよみつくすとも、といへるなるべし。

これは、よろづのくさ木、とりけだ物につけて、心を見するなり。このうたは、かくれたる所なむなき。されど、はじめのそへうたとおなじやうなれば、すこし、さまをかへたるなるべし。すまのあまのしほやくけぶり風をいたみおもはぬかたにたなびきにけり、このうたなどやうかなふべからむ。

いつゝには、たゞごとうた。

いつはりのなき世なりせばいかばかり人のことのはうれしからまし、といへるなるべし。

これは、事のとゝのほり、たゞしきをいふ也。このうたの心、さらにかなはず。とめうたとやいふべからむ（山ぞくらあくまでいろを見つるかな花ちるべくも風ふかぬ世に。）

むつには、いはひうた。

このとのはむべもとみけりさきくさのみつばよつばにとのづくりせり、といへるなるべし。

これは、世をほめて、神につぐるなり。このうた、いはひうたとはみえずなむある。かすがのにわかなつみつゝよろづ世をいはふ心は神もしるらむ。これらや、すこしかなふべからむ。おほよそ、むくさにわかれんことは、えあるまじき事になむ。

今の世の中、いろにつき、人の心花になりにけるより、あだなるうた、はかなきことのみいでくれば、いろごのみのいへに、むもれ木の人しれぬことゝなりて、まめなるところには、

花すゝきほにいだすべきことにも、あらずなりにたり。そのはじめをおもへば、かゝるべくなむあらぬ。いにしへの世々のみかど、春の花のあした、秋の月の夜ごとに、さふらふ人々をめして、ことにつけつゝ、うたをたてまつらしめ給。あるは、花をこふとて、たよりなきところにまどひ、あるは月を思とて、しるべなきやみにたどれる、心〳〵を見たまひて、さかし、をろかなりとしろしめしけむ。しかあるのみにあらず、さゞれいしにたとへ、つくば山にかけて、きみをねがひ、よろこび身にすぎ、たのしび心にあまり、ふじのけぶりによそへて人をこひ、松虫のねに友をしのび、高砂、すみの江のまつも、あひをひのやうにおぼえ、おとこ山のむかしを思いでゝ、をみなへしのひとときをくねるにも、歌をいひてぞなぐさめける。又、はるのあしたに、花のちるを見、秋のゆふぐれに、このはのおつるをきゝ、あるは、としごとに、かゞみのかげに見ゆる雪と浪とをなげき、草のつゆ、水のあわを見て、我身をおどろき、あるは、きのふはさかえをこりて、時をうしなひ、世にわび、したしかりしもうとくなり、あるは、松山の浪をかけ、野なかの水をくみ、秋はぎのしたばをながめ、あかつきのしぎのはねがきをかぞへ、あるは、くれ竹のうきふしを人にいひ、よし野河をひきて、世の中をうらみきつるに、今は、ふじの山もけぶりたゝずなり、ながらのはしもつくる

なり、ときく人は、うたにのみぞ心をなぐさめける。いにしへより、かくつたはるうちにも、文武天皇ならの御時よりぞ、ひろまりにける。かのおほむ世や、哥の心をもしろしめしたりけむ。かのおほむ時に、おほきみつのくらゐ、かきのもとの人まろなむ、うたのひじりなりける。これは、きみも、人も、身をあはせたりといふなるべし。秋のゆふべ、龍田川にながるゝもみぢをば、みかどのおほむめに、錦と見たまひ、春のあした、よしのゝ山のさくらは、人まろが心には、くもかとのみなむおぼえける。又、山のべのあか人といふ人ありけり。うたにあやしくたへなりけり。人まろは、赤人がかみにたゝむ事かたく、あか人は、人まろがしもにたゝむことかたくなむありける。ならのみかどの御うた、龍田川もみぢみだれてながるめりわたらばにしきなかやたえなん。人まろ、梅のはなそれともみえず久かたのあまぎる雪のなべてふれゝば。ほのぼのとあかしのうらのあさぎりにしまがくれゆく舟をしぞおもふ。赤人、春のゝにすみれつみにとこしわれぞ野をなつかしみひとよねにける。わかのうらにしほみちくればかたをなみあしべをさしてたづなきわたる。この人々をきて、又すぐれたる人も、くれ竹の世々にきこえ、かたいとのよりくに、たえずぞありける。これよりさきのうたをあつめてなむ、万えふしふとなづけられたりける。ここに、いにしへのことをも、うたの心をもしれる人、わづかにひとりふたりなりき。しかあれど、これかれ、えたる所、えぬ所たがひになむある。かの御時よりこのかた、としはもゝとせあまり、世はとつきになむなりにける。いにしへの事をも、うたをも、しれる人、よむ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertc